

## 日本の平安時代にお ける「盂蘭盆供」の 源流と變遷(下)

李守愛

義守大学応用日語学系助教授

### 第三節 中国における「盂蘭盆」 と道教思想との習合

現在、台湾ではお中元になると、家々や寺院では諸仏や先祖に精進料理を盛った盆を供える。中国では昔から七月十五日に盛大な「盂蘭盆会」の供養を催し、「目連救母」の物語も唐の時代から広く流行し、以来、随所で物語として語られ、また、戯曲等で上演されてきた<sup>⑦⑨</sup>。

「盂蘭盆」の源流については、西晋(265~317)の竺法護が翻訳した『仏説盂蘭盆經』<sup>⑧⑩</sup>には、

## 日本平安時代「盂蘭盆 會」之源流和變遷(下)

李守愛

義守大學應用日語學系副教授

### 第三節 中國「盂蘭盆」與道 教思想的融和

在台灣每逢中元，家家戶戶及寺院都供奉豐盛的素食祭祀諸佛和祖先。中國自古以來就有在七月十五日舉行盛大「盂蘭盆」供養之習俗。「目連救母」的故事在唐朝就廣為流傳。並被編成故事，並常於戯曲中演出<sup>⑦⑨</sup>。

「盂蘭盆」之源流記載於西晋(265~317)竺法護所翻譯的《佛説盂蘭盆》經中<sup>⑧⑩</sup>載曰：

《普門學報》第三十一期

聞如是。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園、大目乾連始得六通。欲度父母報乳哺之恩。即以道眼觀視世間。見其亡母生餓鬼中。不見飲食皮骨連立。目連悲哀。即鉢盛飯往餉其母。母得鉢飯。便以左手障鉢右手搏飯食未入口化成火炭。遂不得食。目連大叫悲号啼泣。馳還白佛。具陳如此。佛言。汝母罪根深結。非汝一人力所奈何。汝雖孝順聲動天地。天神地神邪魔外道。道士四天王神。亦不能奈何。當須十方眾僧威神之力。乃得解脫。吾今當為汝說救濟之法。令一切難皆離憂苦罪障消除。佛告目連。十方眾僧於七月十五日僧自恣時。當為七世父母厄難中者。具飯百味五果汲灌盆器。香油錠燭床敷臥具。盡世甘美以着盆中。供養十方大德眾。

聞如是。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。大目乾連始得六通。欲度父母報乳哺之恩。即以道眼觀視世間。見其亡母生餓鬼中。不見飲食皮骨連立。目連悲哀。即鉢盛飯往餉其母。母得鉢飯。便以左手障鉢右手搏飯。食未入口化成火炭。遂不得食。目連大叫。悲號啼泣。馳還白佛。具陳如此。佛言。汝母罪根深結。非汝一人力所奈何。汝雖孝順聲動天地。天神地神邪魔外道。道士四天王神。亦不能奈何。當須十方眾僧。威神之力。乃得解脫。吾今當為汝說救濟之法。令一切難皆離憂苦罪障消除。佛告目連。十方眾僧於七月十五日僧自恣時。當為七世父母。及現在父母厄難中者。具飯百味五果汲灌盆器。香油錠燭床敷臥具。盡世甘美以著盆中。供養十方大德眾僧。

とある。七月十五日を盂蘭盆会の日を定めたというのである<sup>⑧)</sup>。

釋迦亦感念其志，遂訂七月十五日為盂蘭盆會之日<sup>⑧)</sup>。

仏教では、毎年の四月の十五日より七月十五日にかけての三ヶ月間に僧侶は寺院の中で修行に専心しなければならない。「安居」とか「結夏」あるいは「坐臘」と呼ばれる。七月十五日に僧侶が休養を取り、懺悔の集会が行われて、三ヶ月間の修行を反省する。それを「自恣日」と称する<sup>⑧</sup>。「自恣日」に十方の僧侶に供養すると、その功德は殊盛であるということから、苦難に墮ちた母親が救われるというのである。

『仏教文化』の「盂蘭盆」の項<sup>⑨</sup>には、次のように見える。

盂蘭盆会挙行的儀式、最早は梁大同四年(538)武帝於同泰寺設盂蘭盆齋。義楚在『釈氏六帖』四十五云、『宏明』云、梁武每於七月十五日普寺送神供養，以車日送，繼目連等。從梁武帝後、歷代皇帝以及百姓都举行這種儀式。

とある。中国では梁武帝(520~527在位)の大同四年(538)に始めて「盂蘭盆会」が行われた。七月十五日になると、梁の

依佛教儀禮，毎年四月十五日起至七月十五日止三個月期間，僧侶須於寺院中專心修行。稱為「安居」、「結夏」或是「坐臘」。七月十五日僧侶休養並行懺悔之集會。在三個月期間修行並反省。稱為「自恣日」<sup>⑧</sup>。據言「自恣日」時供養十方僧侶，其功德至為殊勝，因而可救墮於苦難之母親。

《佛教文化》「盂蘭盆」項<sup>⑨</sup>中可見如下之記載：

盂蘭盆會舉行的儀式，最早是梁大同四年(538)武帝於同泰寺設盂蘭盆齋。義楚在《釋氏六帖》四十五云，《宏明》云：梁武每於七月十五日普寺送神供養，以車日送，繼目連等。從梁武帝後，歷代皇帝以及百姓都舉行這種儀式。

在中國，梁武帝(520~527在位)大同四年(538)始行「盂蘭盆會」。梁武帝更於每年的七月十五日舉行

《普門學報》第三十一期

武帝が年々盛大な「盂蘭盆會」を行って（『佛祖統紀』卷四十三）、寺院に「盆」を供養した。梁の武帝の後、中国の歴代の皇帝及び民間は「盂蘭盆會」の儀式が行ってきたというのである。顔之推（521~591）の『顏氏家訓』の卷七の「終制篇」<sup>⑧</sup>には、

及七月半盂蘭盆望於汝也。

とある。また、『荊楚歲時記』の「盂蘭盆會」には<sup>⑨</sup>、

七月十五日、僧尼道俗、悉營盆供諸佛。按『盂蘭盆經』云。有七葉功德。並幡花、歌鼓、果食送之。蓋由此也。（中略）故後人、因此廣為華飾。乃至刻木、割竹、飴蠟、剪綵、模花葉之形、極工妙之巧。

とある。「盂蘭盆」を行う風習はすでに六朝時代にあったと考えられる。

七月十五は中元の日、地官、人間を校勾搜選し、善惡を分別す。諸天、聖衆普

盛大的「盂蘭盆會」（『佛祖統紀』卷四十三）、於寺院供養「盆」。梁武帝之後、中國歷代皇帝及民間亦行「盂蘭盆會」之儀式。顔之推（521~591）所著《顏氏家訓》卷七「終制篇」<sup>⑧</sup>載曰：

及七月半盂蘭盆望於汝也。

此外，《荊楚歲時記》「盂蘭盆會」<sup>⑨</sup>中亦載：

七月十五日、僧尼道俗、悉營盆供諸佛。按《盂蘭盆經》云。有七葉功德。並幡花、歌鼓、果食送之。蓋由此也。（中略）故後人、因此廣為華飾。乃至刻木、割竹、飴蠟、剪綵、模花葉之形、極工妙之巧。

由此可知行「盂蘭盆」之俗殆始於六朝時代。

七月十五為中元日。校勾搜選地官、人類、分別善惡。諸天、聖

く宮中に詣り、劫数を簡定し、人鬼は録を伝う。餓鬼、囚徒一時に皆な集まり、其の日を以て玄都の大獻を作し、玉京山に於いて諸の花果、珍奇、異物、幢幡、宝蓋、清膳、飲食を採り、諸聖衆に献じ、道士は其の日の夜に於いて講誦す。是の經、十方の大聖齊しく靈篇を詠ずれば、囚徒、餓鬼俱に飽満し、衆苦より免れ、人中に還るを得」と。『道經』が果して何を指すかは詳らかではないが、おそらくは南北朝に成立した道書の一つであろう。ここにみえる中元という言葉や、囚徒が衆苦を免れて「人中に還る」という思想などは明らかに道教的思想にもとづくものであるが、これが日本に伝えられて（齐明天皇三年＝657、一に推古天皇十四年＝606とする説もある）仏教的行事の如く考えられているのは、すでに盂蘭盆儀式が日本に伝来する前に、道、釈混融した結果によるものである<sup>86</sup>。

仏教の思想に関わる「盂蘭盆」が道教の思想と融合して「中元節」になっていたことを明らかにしている。初期道教における布教の一法として、五斗米教が信徒に三官手書と称する誓約書を三通したためさせ、一通を山中に置き、一通を地下に埋め、一通を水中に流して、

衆普詣宮中。簡定劫數，人鬼傳錄。餓鬼、囚徒一時皆集。其日作以玄都大獻，於玉京山採諸花果、珍奇、異物、幢幡、寶蓋、清膳、飲食，獻諸聖衆。道士於其日の夜講誦是經。十方大聖若齊詠靈篇，囚徒、餓鬼俱飽満，以免衆苦，得還人中。「道經」一書所指為何雖未明，大概是成立於南北朝的道教書籍之一。在此所言之中元一詞，以及囚徒免於衆苦而「還人中」之思想等明道顯的是以道教思想為依據。然而，「盂蘭盆」傳抵日本時雖已被視為佛教儀式（亦有齐明天皇三年＝657至推古天皇十四年＝606之説）。其實「盂蘭盆」儀式傳抵日本之前，道、釋思想已相融和<sup>86</sup>。

以佛教思想為背景的「盂蘭盆」，融和道教思想後，形成「中元節」儀式。為了便於宣揚道教，「五斗米教」以所謂的三官手書之誓約書三封授予信徒。令信徒將其中一封置於山中，一通埋於地下，

《普門學報》第三十一期

天・地・水の三神にささげたのが三官信仰の嚆矢といわれている。いっばんに三官大帝と敬称されるほか、三元大帝ともいい。神格は玉皇大帝に次ぎ、道教上で重きをなしているばかりでなく、民衆にとってもその信仰は極めて篤く、三官廟は全中国に広く分布している<sup>87)</sup>。

一月十五日は天官の誕生日で、七月十五日は地官の誕生日で、十月十五日は水官の誕生日である。七月十五日の「中元」と正月の十五日の「上元」、十月十五日の「下元」とともに、「三元」を成しているのである。中元節は、地官大帝の誕生日にあたり、後世では仏教の盂蘭盆会と習合して混淆甚だしく、ために祭祀儀礼面でも影がうすれた感なきにしもあらずだが、実情はしからず、伝統的習俗はなお牢固として抜き難いものがある。

地官大帝は中元二品七氣地官清虛大帝とも称し、また中元二品地官赦罪青靈地君という称号が示しているように、本日を神誕とみなすよりも、むしろ親しく降臨して、下界の人々が知らず知らずのうちに犯してしまった倫理道德的災過を赦免してくださる。「地官赦

一封則順水而流。此即供奉天、地、水三神，亦即三官信仰之嚆矢。信徒以「三官大帝」敬稱外，又稱為「三元大帝」。其神格僅次於玉皇大帝。除道教外，一般民眾也篤信之。中國各地均有三官廟分佈<sup>87)</sup>。

如前述，在民間信仰中，一月十五日是天官生日，七月十五日為地官生日，十月十五日為水官生日。七月十五日又稱為「中元」，正月十五日稱為「上元」，十月十五日稱為「下元」，共稱「三元」。中元節相當於地官大帝的生日，後來則與以佛教思想為背景的「盂蘭盆會」結合。儀式上，兩者似無太多相似之處，實則就傳統習俗而言彼此影響深厚。

地官大帝亦稱「中元二品七氣地官清虛大帝」，或是「中元二品地官赦罪青靈地君」。如稱號所示，此神社在誕生日時降臨人間，以赦免凡人在不知不覺中所犯之過錯。凡人以懼慎的心情，等待此一「地官赦罪日」<sup>88)</sup>。

罪」を待ちもうけて懼れ慎しむべき日である。⑧⑧

道教によると、人間の福や禍を決める天、地、人の三神がいて、天官は「上元節」、地官は「中元節」、人官は「下元節」をそれぞれ司っている。旧暦の七月十五日は、地官が司る「中元節」で、地官がこの世に来て人間の善悪を調べる。そのために民間では、地官を祭る儀式があり、経をあげ食べ物を供えて四方の浮ばれぬ魂を濟度するのである⑧⑨。

「盂蘭盆」は初め仏教的行事であったが、道教が盛んになるにつれて、道教の中に取り入れられて行った。六朝時代、既に「盂蘭盆」の風習は成立しており、六朝末期以後、道教、仏教共通の祭日となって、唐代になると、いっそう盛んに催された。

漢代に興り、以後東晋南北朝と漸く盛んになった道教は、唐代に至って急激なる発展を遂げるに至った。それは唐における帝室は李姓であるがために、道教の祖といわれる老子と同姓であり、従って、その宗教たる道教をもって、唐朝の宗教なりと考えるに至ったがためであった。道教は東漢（紀元前二世紀）

道教思想認為，天、地、人三神決定了人類福、禍。天官司掌「上元節」，地官司掌「中元節」，人官司掌「下元節」。農曆七月十五日即為地官司掌之「中元節」。地官抵人間，查其善惡。於是民間有祭地官之儀式。此日誦經、供奉食物，以濟渡四方飄盪的魂魄⑧⑨。

「盂蘭盆會」最初雖為佛教例行之節慶儀式，隨著道教的盛行，與道教融和。六朝時代，行「盂蘭盆會」之風俗已存在。六朝末期以後，已成為道教、佛教共通之節慶。至唐代，「盂蘭盆會」更被盛大舉行。

此外，興於漢代，盛行於東晋南北朝的道教，至唐代時則快速發展。唐朝帝室為李姓，與道教之祖老子同姓。因此，道教被視為唐朝的國教。道教雖成立於東漢（紀元前二世紀），至唐時代進入最盛期。此時道教信徒大增。與道教相關的書籍大增，教理完備，予以中

《普門學報》第三十一期

に成立して、唐の時代には最盛期に入っていたのである。道教の信徒が大量に増えて、道教に関する書籍も多くなり、教理も完備されていった。道教も中国の社会に大きな影響をもたらすようになっていた<sup>90)</sup>。

『新唐書』<sup>91)</sup>には、

上元元年。進号天后。建言十二事。(中略)王公以降皆習老子。

とある。則天武后は上元元年(674)に王后になってから、十二の事を建議した。その一つは親王以下の全員に皆老子の思想を習わせることを建議したことがある。

唐の玄宗(712~755在位)の勅により編纂された『大唐六典』<sup>92)</sup>には、

其四曰三元齋、正月十五日天官為上元、七月十五日地官為中元、十月十五日水官為下元。

國社會極大的影響<sup>90)</sup>。

根據《新唐書》<sup>91)</sup>記載：

上元元年。進號天后。建言十二事。(中略)王公以降皆習老子。

由此可知，則天武后於上元元年(674)被封為王后之後，提出十二項建議。其中建議親王以下皆習老子思想。

唐玄宗(712~755在位)敕令編纂的《大唐六典》<sup>92)</sup>記載：

其四曰三元齋，正月十五日天官為上元，七月十五日地官為中元，十月十五日水官為下元。



とある。また、同書⑨③には、

凡道觀、三元日(中略)及僧寺別敕設齋應行道。

とある。さらに、同書の「卷二十二、中  
尚署」には、

七月十五日、進孟蘭盆。

とある。三元日には道觀と寺院で設齋  
しなければならないと決めている。ま  
た、『唐會要』⑨④にも、

(開元)二十七年五月二十八日勅、祠部奏、(中  
略)唯千秋節及三元行道設齋、宜就開元觀寺。

とある。唐の玄宗の開元二十七(739)年  
に勅を下して、「千秋節」と「三元」は、  
開元寺において行道設齋を行わしめた。  
そして、玄宗の天寶元年(742)には、天  
下の諸觀に命じて毎正月七月十月の各

此外、同書⑨③記載：

凡道觀，三元日(中略)及僧  
寺別敕設齋應行道。

同書「卷二十二，中尚署」亦載  
曰：

七月十五日、進孟蘭盆。

亦即，三元日必須於道觀和寺院設  
齋。《唐會要》⑨④亦載曰：

(開元)二十七年五月二十八  
日敕、祠部奏、(中略)唯千  
秋節及三元行道設齋、宜就開元  
觀寺。

唐玄宗開元二十七(739)年敕令，  
於「千秋節」和「三元」時於開元  
寺行道設齋。並於玄宗天寶元年  
(742)令天下諸觀，由崇玄館學士  
於每年正月、七月、十月的十五日

《普門學報》第三十一期

十五日の三元日には、崇玄館学士をして『道德經』、『南華經』を講ぜしめ、百官に行香をさせ（線香を供える）、詣らしめている（『冊府元龜』卷五十四、『全唐文』二十四）。

唐の高宗は「老君は朕之本系なり」（『全唐文』卷十二）といい、玄宗は「玄元皇帝は朕の始祖なり」（全唐文卷十八）といい、（中略）仏教外護者として最も有名な則天武后においてすら老君をもって唐室の祖となし、官吏採用試験制度に『老子道德經』を加えたほどであり（旧唐書五、新唐書四四）、玄宗の如きは「玄元皇帝は仙聖の宗師にして、国家の本系なり、昔草昧の始に受命の期を告げられ、高祖に応じたり」（全唐文卷二十二）とて、唐朝の興起は全く道教の祖元皇帝すなわち老子によったものとしている<sup>95</sup>。

唐の皇帝の高祖、高宗、則天武后、玄宗等が道教で玄元大帝と称された老子を始祖として尊していた。道教の地官の誕生日となす七月十五日の「盂蘭盆」も重要な節会と見られた。則天武后の如意元年（692）の七月十五日には、皇宮からお盆供えを各寺院に送った。詩人の楊炯（？~692）が「盂蘭盆賦」を

之「三元日」講《道德經》、《南華經》。並令百官行香（《冊府元龜》卷五十四、《全唐文》二十四）。

唐高宗曾云：「老君為朕之本系」（《全唐文》卷十二），唐玄宗亦云：「玄元皇帝乃朕之始祖」（《全唐文》卷十八）。則天武后也視老君為唐室之祖，並在考試科目中增加《老子道德經》（《舊唐書》五、《新唐書》四四）。唐玄宗曾云：「玄元皇帝為仙聖之宗師，國家之本系。昔草昧之始、告受命之期，以應高祖」（《全唐文》卷二十二）<sup>95</sup>。

唐高祖、高宗、則天武后、玄宗等，均視道教中被稱為玄元大帝的老子為始祖。因此和地官生日同日的「盂蘭盆會」也被視為重要節慶儀式。則天武后如意元年（692）七月十五日，皇宮曾將盆供送至各寺院。詩人楊炯（？~692）曾書有「盂蘭盆賦」一文為記。從此賦文

書いて、その時の盛大な情況を書き込んだ。「盂蘭盆賦」(『全唐文』卷二百九十)には、

大周如意元年秋七月聖神皇帝御洛城南門會十方  
賢衆(中略)供飾盂蘭。

とある。則天武后も洛陽で行なわれた盛大な「盂蘭盆會」に参加したことが分かる。『大唐六典』<sup>96</sup>には、

毎年(七月)十五日、進盂蘭盆。

とある。唐の時代には、七月十五日になると皇帝や貴族が毎年必ず「盂蘭盆」を官定の寺院に送っている。そして、音楽を奏でた儀杖と「盆」を供える時には官員が随行した。庶民も寺院と道觀に様々な「盆」を供養した。唐の詩人の殷堯藩の「中元日觀諸道士步虛」(『全唐詩』「卷四百九十二」)には、

之内容可窺見「盂蘭盆會」盛大舉行的情況。如《盂蘭盆賦》(《全唐文》卷二百九十)所載：

大周如意元年秋七月聖神皇帝  
御洛城南門會十方賢衆(中  
略)供飾盂蘭。

由此可知、則天武后亦參加了於洛陽舉行的盛大的「盂蘭盆會」。《大唐六典》<sup>96</sup>載曰：

毎年(七月)十五日、進盂蘭  
盆。

每逢七月十五日、唐朝皇帝、貴族毎年必將「盂蘭盆」供送往官定寺院。官員隨行、途中奏樂、儀杖。庶民亦於寺院、道觀供養「盆」供。唐朝詩人殷堯藩於〈中元日觀諸道士步虛〉(《全唐詩》卷四百九十二)一詩中吟誦：

《普門學報》第三十一期

玄都開秘籙 白石禮先生  
上界秋光淨 中元夜氣清  
星辰朝帝處 鸞鶴步虛聲  
玉洞花常發 珠宮月最明  
掃壇天地肅 投簡鬼神驚  
儻賜刀圭藥 還留不死名

玄都開秘籙 白石禮先生  
上界秋光淨 中元夜氣清  
星辰朝帝處 鸞鶴步虛聲  
玉洞花常發 珠宮月最明  
掃壇天地肅 投簡鬼神驚  
儻賜刀圭藥 還留不死名

とある。道教の道士が中元の行事と法事を催したことがわかる。唐の詩人の令狐楚の「中元日贈張天師」<sup>97</sup>の中に、

由此詩内容可知中元節慶儀式之盛況。唐朝詩人令狐楚吟於〈中元日贈張尊師〉<sup>97</sup>一詩吟誦：

偶來人世值中元 不獻玄都永日間  
寂寂焚香在仙觀 知師遙禮玉京山

偶來人世值中元  
不獻玄都永日間  
寂寂焚香在仙觀  
知師遙禮玉京山

とあり、「盂蘭盆會」の情況を詠み込んでいる。また、白居易と同時代の盧拱は「中元日觀法事」<sup>98</sup>を題して、

「盂蘭盆會」之盛況於詩中充分展現。盧拱於〈中元日觀法事〉<sup>98</sup>中詠曰：

四孟逢秋序 三元得氣中  
雲迎碧落步 章奏玉皇宮  
壇滴槐花露 香漂柏子風  
羽衣凌縹緲 瑤轂輾虛空  
久慕餐霞客 常悲習蓼蟲  
青囊如何授 從此訪鴻蒙

四孟逢秋序 三元得氣中  
雲迎碧落步 章奏玉皇宮  
壇滴槐花露 香漂柏子風  
羽衣凌縹緲 瑤轂輾虛空  
久慕餐霞客 常悲習蓼蟲  
青囊如何授 從此訪鴻蒙

と詠んでいる。「盂蘭盆會」の荘嚴な儀  
式の状況を詩に詠み込んでいる。また、  
李郢の「中元夜」(『全唐詩』、「卷五百  
九十」)には、

江南水寺中元夜 金粟欄邊見月娥  
紅燭影迴仙態近 翠鬟光動看人多  
香飄彩殿凝蘭麝 露繞輕衣雜綺羅  
湘水夜空巫峽遠 不知歸路欲如何

描述「盂蘭盆會」節慶儀式的  
莊嚴。李郢〈中元夜〉(《全唐詩》，  
卷五百九十)中誦曰：

江南水寺中元夜  
金粟欄邊見月娥  
紅燭影迴仙態近  
翠鬟光動看人多  
香飄彩殿凝蘭麝  
露繞輕衣雜綺羅  
湘水夜空巫峽遠  
不知歸路欲如何

とある。中国の江南の地方も盛んに「中  
元」の行事が行れた。李商隱の「中元作」  
(『全唐詩』、卷五百四十)には、

絳節飄颻宮國來 中元朝拜上清回  
羊權須得金條脫 溫嶠終虛玉鏡臺  
曾省驚眠聞雨過 不知迷路為花開  
有娥未抵瀛洲遠 青雀如何鳩鳥媒

由此詩中可瞭解中國江南地方「中  
元」儀式的盛況。李商隱所著〈中  
元作〉(《全唐詩》，卷五百四十)中  
吟曰：

絳節飄颻宮國來  
中元朝拜上清回  
羊權須得金條脫  
溫嶠終虛玉鏡臺  
曾省驚眠聞雨過  
不知迷路為花開

《普門學報》第三十一期

有娥未抵瀛洲遠  
青雀如何鳩鳥媒

とある。『法苑珠林』⑨⑨にも、

國家大寺、如似長安西明、慈恩寺等寺。(中略)  
毎年送盆獻供種種雜物。及與盆音樂人等、並有  
送盆官人。來者非一。

とある。毎年、「盂蘭盆會」が行われる  
時に、かならず長安の大きな寺院の西  
明寺や慈恩寺などに色々な供え物を  
送った。唐の詩人の岑參は『登慈恩寺浮  
図』⑩⑩の中に、

塔勢如湧出 孤高聳天宮  
登臨出世界 磴道盤虛空  
突兀壓神州 崢嶸如鬼工  
四角礙白日 七層摩蒼穹  
下窺指高鳥 俯聽聞驚風  
連山若波濤 奔湊似朝東  
青槐夾馳道 宮觀何玲瓏  
秋色從西來 蒼然滿關中

《法苑珠林》⑨⑨中亦載曰：

國家大寺，如似長安西明，慈  
恩寺等寺。(中略) 毎年送盆  
獻供種種雜物。及與盆音樂人  
等，並有送盆官人。來者非  
一。

毎年舉行「盂蘭盆會」之時，必定  
送各種供品至西明寺、慈恩寺等長  
安大寺院。唐朝詩人岑參於〈登慈  
恩寺浮圖〉⑩⑩中吟誦：

塔勢如湧出 孤高聳天宮  
登臨出世界 磴道盤虛空  
突兀壓神州 崢嶸如鬼工  
四角礙白日 七層摩蒼穹  
下窺指高鳥 俯聽聞驚風  
連山若波濤 奔湊似朝東  
青槐夾馳道 宮觀何玲瓏  
秋色從西來 蒼然滿關中

五陵北原上 萬古青濛濛  
淨理了可悟 勝因夙所宗  
誓將挂冠去 覺道資無窮

五陵北原上 萬古青濛濛  
淨理了可悟 勝因夙所宗  
誓將挂冠去 覺道資無窮

とある。慈恩寺は長江曲江の近くにあり、唐の高宗が皇太子であったころ、生母の文德皇后のために建てたものである。文人墨客はたびたびここに登って詩を賦した。岑参は慈恩寺に登臨して、その壮大な景觀を詠んでいるのである。唐の代宗（762~779 在位）は七月望日宮中にりっぱな「孟蘭盆」を設けたと伝えられている。

『唐書』⑩には、

代宗七月望日、於内道場造孟蘭盆、飾以金翠、所費百万。

とある。代宗が「孟蘭盆會」のために「百万円」（高額という意味）もかけたことがある。また、唐の徳宗（780~804 在位）も貞元七年（791）に「七月十五日題章敬寺」⑩の詩を作っていたことがある。

武宗はとくに道教を強く信仰している。円仁の『入唐求法巡礼行記』⑩には、

慈恩寺位於長江曲江附近。是唐高宗為生母文德皇后所建之寺院。唐朝之文人墨客常登此寺吟詩作賦。岑参就是在登臨慈恩寺時，為此地景觀所感而吟詠此詩。據傳唐代宗（762~779 在位）曾於七月望日在宮中舉行盛大的「孟蘭盆會」。

《唐書》⑩載曰：

代宗七月望日，於内道場造孟蘭盆，飾以金翠，所費百万。

可知，代宗舉行「孟蘭盆會」時不惜花費「百萬」巨資。唐徳宗（780~804 在位）於貞元七年（791）曾於參加「孟蘭盆會」後，吟詠〈七月十五日題章敬寺〉⑩一詩為記。

唐武宗篤信道教。圓仁所著《入唐求法巡禮行記》⑩中載曰：

《普門學報》第三十一期

會昌四年(三月)、勅下、朕欲駕幸東京、仍曉示百寮、如有朝臣諫者、誅身滅族。勅不許供佛牙。(中略)宰相李紳、李德裕奏停三長月、作道士教新定三日月、正月上元・七月中元・十月下元。(中略)今上偏信道教、憎嫉佛法、不喜見僧、不欲聞三寶。(中略)今上便令焚燒經教、毀拆佛像、起出僧眾、各歸本寺。於道場內安置天尊老君之像、令道士轉道經、修煉道術。(中略)道士奏云、孔子說云、李氏十八子、昌運方盡、便有黑衣天子理國。臣等竊惟黑衣者、是僧人也。皇帝受其言、因此憎嫌僧尼。

會昌四年(三月)、敕下:「朕欲駕幸東京、仍曉示百寮、如有朝臣諫者、誅身滅族。」敕不許供佛牙。(中略)宰相李紳、李德裕奏停三長月、作道士教新定三日月、正月上元、七月中元、十月下元。(中略)今上偏信道教、憎嫉佛法、不喜見僧、不欲聞三寶。(中略)今上便令焚燒經教、毀拆佛像、起出僧眾、各歸本寺。於道場內安置天尊老君之像、令道士轉道經、修煉道術。(中略)道士奏云:「孔子說云、李氏十八子、昌運方盡、便有黑衣天子理國。臣等竊惟黑衣者、是僧人也。」皇帝受其言、因此憎嫌僧尼。

とある。唐の武宗が會昌四年(844)三月に東京に駕幸の勅を下した。さらに、勅して、四処の仏牙供養を許さず。宰相の李紳と李德裕が奏して、三長月(正月と五月と九月の一日から十五日まで、八齋戒を守り、昼を過ぎてからは物を

由此可知、唐武宗會昌四年(844)三月駕幸東京時、敕令不許於供養佛牙。宰相李紳和李德裕並奏請停三長月(正月、五月、九月之一日至十五日守八齋戒。過午則



一切食べないという戒律)を停止して、道士の三元月を定め、仏像を壊して、道場に天尊老君(老子)の像を安置している。また、同書<sup>⑩</sup>には、

城中諸寺七月十五日供養、諸寺作花蠟・花餅・假花菓樹等、各競奇妙。常例、皆於佛殿前鋪設供養、傾城巡寺隨喜、甚是盛會。今年諸寺鋪設供養、勝於常年。勅令諸寺佛殿供養花菓等、盡搬到興唐觀祭天尊。十五日、天子駕幸觀裏、召令百姓令看。

とある。唐代には、「盂蘭盆會」が仏教と道教の同一の祭日になっていた。円仁が見た「中元節」は往年より盛況になっていた。道教を信じた天子の唐の武宗が勅(詔)をして、寺院の供え物を全部道教の廟に運ぶようにと命じ、武宗も自分で道觀(道教の廟)へ行つて、天尊を祭つたというのである。

北宋の孟元老『東京夢華錄注』<sup>⑩</sup>には、

禁食之戒律)、定道士之三元月。更毀壞佛像、於道場安置天尊老君(老子)之像。同書<sup>⑩</sup>又載曰:

城中諸寺七月十五日供養、諸寺作花蠟、花餅、假花菓樹等、各競奇妙。常例、皆於佛殿前鋪設供養、傾城巡寺隨喜、甚是盛會。今年諸寺鋪設供養、勝於常年。敕令諸寺佛殿供養花菓等、盡搬到興唐觀祭天尊。十五日、天子駕幸觀裏、召令百姓令看。

由此可知、唐代時期、「盂蘭盆會」已成為佛教和道教共通之節慶儀式。圓仁所見之「中元節」、盛況更盛於往年。篤信道教的唐武宗更下敕(詔)將寺院の供品全部運往道觀、並親往道觀祭祀天尊。

北宋孟元老所著《東京夢華錄注》<sup>⑩</sup>載曰:

《普門學報》第三十一期

七月十五日、中元節。先數日市井賣冥器・靴鞋・幪頭・帽子・金犀假帶・五綵衣服。以紙糊架子盤遊出賣、潘樓并州東西瓦子、亦如七夕。要鬧處亦賣果食、種生・花果之類。及印賣尊勝目連經。又以竹竿斫成三腳、高三五尺、上織燈窩之狀、謂之盂蘭盆。掛搭衣服冥錢在上焚之。構肆樂人自過七夕、便般目連救母雜劇、直至十五日止。(中略)十五日供養祖先素食。

七月十五日，中元節。先數日市井賣冥器、靴鞋、幪頭、帽子、金犀假帶、五綵衣服。以紙糊架子盤遊出賣，潘樓并州東西瓦子，亦如七夕。要鬧處亦賣果食、種生、花果之類。及印賣尊勝目連經。又以竹竿斫成三腳，高三五尺，上織燈窩之狀，謂之盂蘭盆。掛搭衣服冥錢在上焚之。構肆樂人自過七夕，便般目連救母雜劇，直至十五日止。(中略)十五日供養祖先素食。

とある。七月十五日の「盂蘭盆會」が亡くなった先祖を供養し、祀る日となった。仏教の行事と中国の伝統的な先祖や鬼魂を尊敬するという習俗が融合したのである。

北宋時期，民眾於七月十五日的「盂蘭盆會」中供養祖先。佛教的慶典儀式與中國傳統的敬祖及祭祀鬼魂的習俗相融和了。

#### 第四節 「盂蘭盆經」と「目連變文」との関係

唐の時代には民間が目連の尊者の孝行譚も広く伝承された。今日『目連變

#### 第四節 「盂蘭盆經」與「目連變文」之關係

唐代時期，目連尊者的孝行譚在民間廣為流傳。時至今日，「目

文』、『大目乾連冥間救母變文』、『目連緣起』などのいわゆる敦煌變文として残されている。潘重規の『敦煌變文新論』<sup>⑩⑥</sup>の中に、

唐の顯慶元年(656)までに俗講經文が「變文」に呼ばれていた。「俗講文」の方式で『仏説孟蘭盆』を『大目乾連冥間救母變文』に訳したのである。

とある。これらの變文(絵解き語りの台文)は二十世紀初頭、甘肅省敦煌の千仏洞内から発見された。<sup>⑩⑦</sup>

とある。潘重規の『敦煌變文新論』<sup>⑩⑧</sup>には、

唐代俗講考「長安寺院與戲場」云、錢易南部新書云、長安戲場多集中於慈恩、小者在青龍、其次薦福・永壽。尼講盛於保唐、名德聚之安國。士大夫之家入道、盡在咸宜。此處所舉、除咸宜一寺不知所在外、其餘如慈恩・青龍・薦福・永壽・保唐・安國六寺全在長安城的東部、即所謂左街也。保唐寺原名菩提寺、在平康坊、會昌末始改此名。故錢易所述、當是大中以後的情形。唐代長安寺院、凡國家有大事追薦行香、以及春秋佳日士大夫遊賞多聚於此。平時以法像莊嚴、繪畫

連變文」、「大目乾連冥間救母變文」、「目連緣起」等敦煌變文依然廣為人知。潘重規所著之《敦煌變文新論》<sup>⑩⑥</sup>中曾云：

唐顯慶元年(656)以前、俗講經文又稱為「變文」。並以「俗講文」的方式將佛説孟蘭盆譯成大目乾連冥間救母變文。

這些變文在二十世紀初、於甘肅省敦煌千佛洞內被發現。<sup>⑩⑦</sup>

如潘重規於所著《敦煌變文新論》<sup>⑩⑧</sup>中述：

唐代俗講考「長安寺院與戲場」云、錢易南部新書云、長安戲場多集中於慈恩、小者在青龍、其次薦福・永壽。尼講盛於保唐、名德聚之安國。士大夫之家入道、盡在咸宜。此處所舉、除咸宜一寺不知所在外、其餘如慈恩・青龍・薦福・永壽・保唐・安國六寺全在長安城的東部、即所謂左街

《普門學報》第三十一期

精好、当有不少遊人、所以戲場蒼萃。宗教的境域以外、並成為民間遊樂消遣的中心。

也。保唐寺原名菩提寺，在平康坊，會昌末始改此名。故錢易所述，當是大中以後的情形。唐代長安寺院，凡國家有大事追薦行香，以及春秋佳日士大夫遊賞多聚於此。平時以法像莊嚴，繪畫精好，當有不少遊人，所以戲場蒼萃。

とある。長安の寺院が宗教の中心地の他に、庶民の遊樂地になった。

長安的寺院除了是宗教境域外，也是民間遊樂消遣的中心

## おわり

「盂蘭盆會」が中国において道積混同した後、日本に伝わってきたのである。灌仏會は盂蘭盆會と共に推古朝に遡り、日本で最も早く受容された法會であり、推古天皇十四年から各寺で行われるようになった。けれども、宮中の儀式に編成されたのは平安時代に入ってからである。『延喜式』には「大膳」・「大藏」・「大政官」・「宮内」・「大炊寮」・「内膳」・「造酒」・「大舍」・「雅樂寮」の各官・寮等に「盂蘭盆」に関する記載が見られ

## 結論

「盂蘭盆會」在傳入日本之前，在中國已融和了道教、佛教思想。灌佛會和盂蘭盆會儀式之舉行可上溯推古朝，是日本最早採納的法會。但是平安時代以後，皇宮正式採用此儀式。《延喜式》的「大膳」、「大藏」、「大政官」、「宮内」、「大炊寮」、「内膳」、「造酒」、「大舍」、「雅樂寮」中的各官、寮等均有與「盂蘭盆會」相

る。宮廷の「盂蘭盆」としては、天平時代に定式化された七寺「盂蘭盆供」があったが、撰関期には、盆供を関係寺院に送る習慣は諸家に広まっていた。

關之記載。天平時代宮廷正式固定於「盂蘭盆會」後將「盂蘭盆供」送至七寺院。攝關時期，盆供送至緣寺之習俗在諸貴族家廣為流行。

### 【註釈】

⑦⑨内田道夫編『北京風俗図譜』、平凡社、1989年、42頁。

⑧⑩『大正大藏經』、「卷十六」。

⑧寺尾義雄『中国文化伝来字典』、河出書房新社、1999年、226頁。

⑧方立天『中国仏教與伝統文化』、桂冠図書公司、1990年、174頁。

⑧張治江等編『仏教文化』、麗文出版社、1995年、1060頁。

⑧趙明曦注、顔之推撰『抱經堂本顔氏家訓注』、「卷七、十八」、378頁。

⑧守屋美都雄訳注、宗懐著『荆楚歳時記』、平凡社、2000年、196頁。

⑧⑩上掲註⑧⑩、199頁。

⑧劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』、風響社、1994年、385頁。

### 【註釋】

⑦⑨内田道夫編，《北京風俗圖譜》（平凡社，1989年）第42頁。

⑧⑩《大正藏》第十六冊。

⑧寺尾義雄，《中國文化傳來字典》（河出書房新社，1999年）第226頁。

⑧方立天，《中國佛教與傳統文化》（桂冠圖書公司，1990年）第174頁。

⑧張治江等編，《佛教文化》（麗文出版社，1995年）第1060頁。

⑧趙明曦註，顔之推撰，《抱經堂本顔氏家訓注》卷七、十八，第378頁。

⑧守屋美都雄譯註，宗懐著，《荆楚歳時記》（平凡社，2000年）第196頁。

⑧⑩上掲註⑧⑩，第199頁。

⑧劉枝萬，《台灣的道教和民間信仰》（風響社，1994年）第385頁。

《普門學報》第三十一期

- ⑧⑧上掲註⑧⑦、385頁。 ⑧⑧上掲註⑧⑦，第385頁。
- ⑧⑨丁秀山『中国の冠婚葬祭』、東方書店、1988年、119頁。 ⑧⑨丁秀山，《中國的冠婚葬祭》（東方書店，1988年）第119頁。
- ⑧⑩道端良秀『中国仏教と社会との交渉』、平樂寺書店、1980年、159頁。 ⑧⑩道端良秀，《中國佛教和社會之交渉》（平樂寺書店，1980年）第159頁。
- ⑧⑪『新唐書』「列伝、卷七十六」。 ⑧⑪《新唐書・列伝・卷七十六》。
- ⑧⑫広池千九郎訓点『大唐六典』、広池学園出版、1991年、102頁。 ⑧⑫廣池千九郎訓點，《大唐六典》（廣池學園出版，1991年）第102頁。
- ⑧⑬上掲註⑧⑫、104頁。 ⑧⑬上掲註⑧⑫，第104頁。
- ⑧⑭『唐会要』「卷五」。 ⑧⑭《唐會要》卷五。
- ⑧⑮上掲註⑧⑩、160頁。 ⑧⑮上掲註⑧⑩，第160頁。
- ⑧⑯上掲註⑧⑫、407頁。 ⑧⑯上掲註⑧⑫，第407頁。
- ⑧⑰『全唐詩』「卷三百三十四」。 ⑧⑰《全唐詩》卷三百三十四。
- ⑧⑱上掲註⑧⑰、「卷四百六十三」。 ⑧⑱上掲註⑧⑰，卷四百六十三。
- ⑧⑲『大正大藏經』「第五十三冊」。 ⑧⑲《大正藏》第五十三冊。
- ⑧⑳目加田誠訳注『唐詩選』、平凡社、1973年、73頁。 ⑧⑳目加田誠譯註，《唐詩選》（平凡社，1973年）第73頁。
- ⑧㉑『唐書』「王縉伝」。 ⑧㉑《唐書・王縉傳》。
- ⑧㉒『唐詩紀事』「卷二、徳宗」、26頁。 ⑧㉒《唐詩紀事》卷二「徳宗」，第26頁。
- ⑧㉓円仁『入唐求法巡礼行記』、仏光文化公司、1998年、230頁。 ⑧㉓圓仁，《入唐求法巡禮行記》（佛光文化公司，1998年）第230頁。
- ⑧㉔上掲註⑧㉓、225頁。 ⑧㉔上掲註⑧㉓，第225頁。

日本の平安時代における「孟  
蘭盆供」の源流と変遷 (下)

- ⑩⑤孟元老撰、鄧之誠注『東京夢華錄』、世界書局、1999年、321頁。
- ⑩⑥孟元老撰，鄧之誠註，《東京夢華錄》（世界書局，1999年）第321頁。
- ⑩⑥潘重規『敦煌變文新論』、文津出版社、1984年、9頁。
- ⑩⑥潘重規，《敦煌變文新論》（文津出版社，1984年）第9頁。
- ⑩⑦植木久行『唐詩歲時記』、講談社、2001年、247頁。
- ⑩⑦植木久行，《唐詩歲時記》（講談社，2001年）第247頁。
- ⑩⑧上掲註⑩③、15頁。
- ⑩⑧上掲註⑩③，第15頁。